

III 遺 物

1. 土 器 (fig.13~15、PL.11)

調査区南半の西と東で検出した2基の井戸S E 2988とS E 2965、南半中央部の3カ所の土壌S K 2966~2968、掘立柱建物S B 2975・2992の柱掘形、およびこれらの遺構を覆う遺物包含層から奈良時代の土師器・須恵器が、また調査区東半の土壌S K 2951~2955からは中世の土師器小皿や瓦質土器・陶器片が出土した。出土量はいずれも極くわずかである。

S E 2988出土土器 (fig.13)

井戸S E 2988は掘立柱塀S A 2960に重複し、掘形の切合い関係からS A 2960より新しい。出土土器は、少量の土師器と須恵器であり、形態・法量・手法からいずれも奈良時代後半

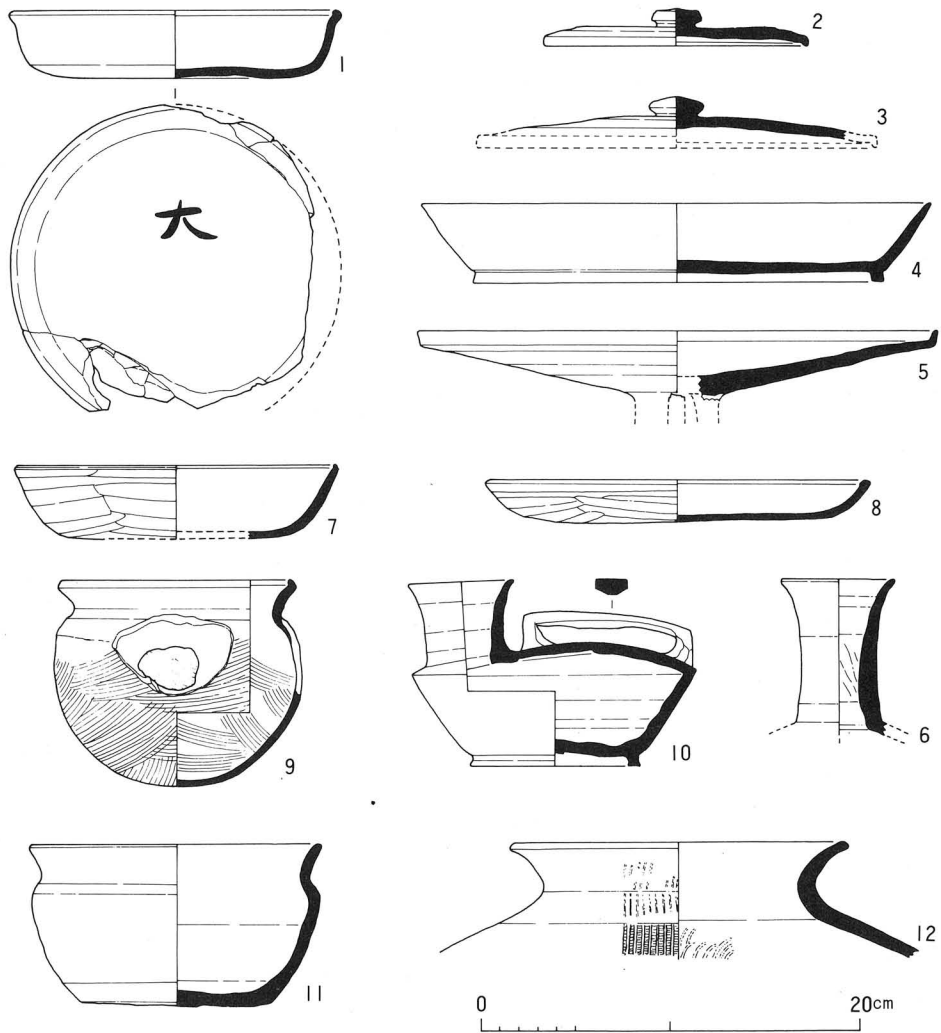


fig. 13 S E 2988(1~6)、S E 2965(7~10)、S K 2968(11~12)出土土器実測図

の平城宮Ⅲ(750年頃)に相当する。

土師器 杯A・杯B・甕の体部破片がある。杯AⅡ(1)は口径17.0cm、器高3.6cm。底部外面ナデ調整のa手法で、暗文・ヘラミガキはない。底部外面に「大」の墨書がある。

須恵器 杯A・杯B蓋・皿B・高杯・壺L・甕類の体部破片がある。杯BⅣ蓋(2)は口径13.8cm。頂部上面はヘラキリ後ロクロナデで仕上げる。杯BⅠ蓋(3)は口縁部を欠く。頂部上面はヘラケズリ後ロクロナデで仕上げる。皿B(4)は口径26.8cm、器高4.2cm。底部外面ヘラケズリ。高杯(5)は杯部のみの破片で口径27.4cm。杯部下面をヘラケズリし、わずかに残る脚部上端に方形透し孔の痕跡を留める。類例から、本来3方向の透しをもつものと推定できる。壺L(6)は口頸部のみの破片。

S E 2965出土土器 (fig.13)

井戸 S E 2965は時期不明の土壌 S K 2956と重複し、S K 2956より古い。出土土器は形態・分量・手法から奈良時代末期の平城宮Ⅴ(780年頃)に相当する。

土師器 杯A・皿A・高杯・甕Aがある。杯AⅡ(7)は口径16.8cm、器高3.9cm。底部と口縁部の外面全面をヘラケズりするC₀手法。皿AⅠ(8)は口径19.8cm、器高2.3cm。同じくC₀手法によるもの。甕A(9)は口径12.1cm、器高10.9cm。体部内外面をハケメ調整し、口縁部をヨコナデして仕上げる。ハケメ調整の及ばない体部上端に成形時の粘土紐のツギ目と叩き成形の痕跡を留める。なお、体部側面に、焼成後に内側から敲打によってあけられた3×2cmの小孔がある。S E 2965出土土器中、完形を保つ唯一の土器であり、おそらくこの井戸の廃絶に伴う祭祀に用いられたものであろう。

須恵器 杯A・高杯・平瓶と壺・甕の体部破片がある。平瓶(10)は体部径15.1cm。器高9.9cm。ヘラケズリによって断面6角に面取りした提梁をもつ。底部外面はヘラキリのまま。

S K 2968出土土器 (fig.13)

土壌 S K 2968は掘立柱塀 S A 2960に重複し、S A 2960より新しい。出土土器は極く少量で、土師器甕Aの小破片と須恵器皿B蓋、鉢、甕Aがある。鉢(11)は口径15.2cm、器高8.6cmで、底部外面はヘラキリのまま。甕A(12)は口径17.3cm。体部内外面と口縁部外面に叩き成形の跡を残す。皿B蓋は口径約28cmで、口縁端部で屈曲する奈良時代後半期(平城宮Ⅲ以降)の特徴をもつ。

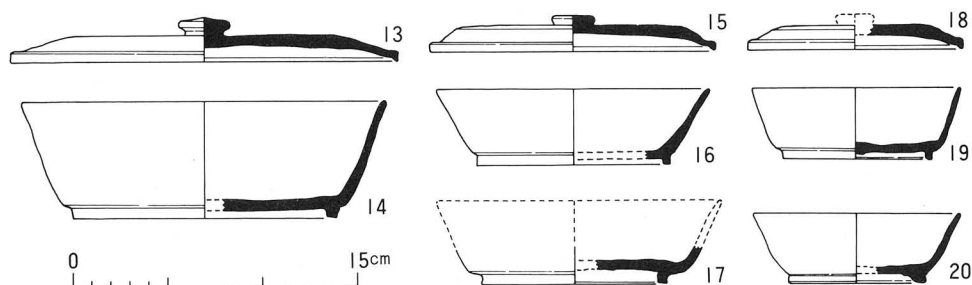


fig. 14 包含層出土土器実測図

包含層出土土器 (fig.14)

包含層の出土土器は、小破片のものが多く、本来の器形や製作技法を観察できる個体がほとんどみられない。ここでは比較的保存状態の良い須恵器杯類の中から、実測可能な個体を示した。各土器の出土位置は13・14・18～20が井戸 S E 2988のある調査区西南部、15・16が調査区中央北半の土壌 S K 2977の周辺、17が井戸 S E 2965西方である。これらの包含層出土土器は、底部外周よりやや内方に高台をもつ杯 B III (17) を例外として、他の個体は、底部外周にはほぼ接する位置にある断面方形の高台、端部付近で屈曲する蓋の口縁部形態に明らかなように、いずれも奈良時代後半期の特徴をもつものであり、形態・法量・手法から平城宮 III (750年頃) に相当するものとみられる。杯 B I 蓋 (13) は口径 20.2cm。頂部上面はヘラケズリ後ロクロナデ。杯 B III 蓋 (15) は口径 15.0cm。頂部上面はヘラケズリ後ロクロナデ。杯 B IV 蓋 (18) は口径 11.2cm。頂部上面はヘラケズリ後ロクロナデで仕上げる。杯 B I (14) は口径 19.2cm、器高 6.2cm。底部外面はヘラケズリ後ロクロナデ。杯 B III (16) は口径 14.3cm、器高 4.0cm。杯 B IV (19) は口径 10.9cm、器高 3.8cm。杯 B IV (20) は口径 10.8cm、器高 3.7cm。底部外面はいずれもヘラキリのままである。

S X 2982 出土土器 (fig.15)

調査区北端の掘立柱建物 S B 2980 に重複する位置にある小土壌から、中に和銅銭を納めた小形の須恵器壺 C が出土した。おそらく地鎮の目的で埋納したものであろう。S X 2982 出土の壺 C (21) は口径 12.6cm、器高 8.6cm。口縁部は円筒形の頸部から水平に近く急に外反して広がり、端部は上方に突出する。体部下半ヘラケズリ、底部外面はヘラキリのままで、断面方形の高台をつける。ほぼ同形態・同手法の壺 C (22) が奈良市前川遺跡の井戸 2 の出土土器にあり、平城宮 III 相当の土師器・須恵器を伴出している。^{註1} 奈良女子大学構内の左京二条六坊十一坪の土壌 S K 2847 では三彩小壺・土馬とともに 5 個体の壺 C が出土した。^{註2} 5 例とも高台をもたず、底部はヘラキリあるいは糸切りのままであり、伴出の土馬の形態からも奈良時代末に近い時期のものと推定される。図示したその 1 例 (23) は口径 13.1cm、器高 7.9cm。口縁端部は上方に突出し、底部外面はヘラキリのままである。S X 2982 出土の壺 C は、形態・手法の特徴が前川遺跡出土例にほぼ一致しており、年代的にも、ほぼ奈良時代後半の平城宮 III (750年頃) に相当する時期のものと推定される。

註 1. 『平城京朱雀大路発掘調査報告』 1974 奈良市

2. 『奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報 II』 1984 奈良女子大学

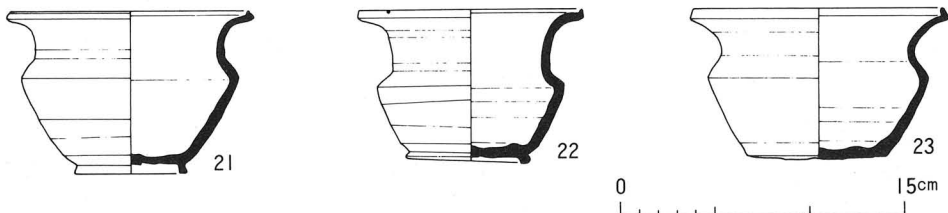


fig. 15 S X 2982・井戸 2・S K 2847 出土土器実測図

2. 瓦 埴 (fig.16)

軒丸瓦2点、軒平瓦1点、埴6点以上のほか、丸・平瓦が整理箱1杯出土した。軒瓦は無論のこと、丸・平瓦も極端に少ないことが注目されよう。

軒丸瓦 6133Kと6225A型式で、どちらも欠損しているうえ磨滅がはなはだしく、特に前者のばあいには認定が困難なほどである。6133Kは小型の中房に1+5の蓮子を配し、外区内縁に27個の珠紋を巡らした単弁16弁蓮華紋軒丸瓦である。13種ある6133型式のうちでもK種は弁端丸く、珠紋帯の内外に圈線のあるのが特徴。遺物包含層出土。6225Aは大型の中房に1+8の蓮子を配し、外区外縁に24個の凸鋸齒紋を巡らした複弁8弁軒丸瓦で、内・外区の境を2重圈線とする。Aは6225型式の他種と比べると、中房が大であり、また弁端尖り子葉高く、しかも内区の地が盛りあがっている。平城宮を代表する軒丸瓦の一つで、特に第二次大極殿=朝堂院地区からの出土が多い。SA2960の柱掘形から出土。

軒平瓦 6721F型式と呼んでいる内区に5回反転均整唐草紋を配したもので、上外区に33個、下外区に34個の珠紋を置くが、脇区にはない。6721型式の中心飾りは“小”字形をなし人間の目鼻に似るが、F種では鼻にあたる中心葉の位置が低く、目にあたる左右葉がほ

ぼ水平である。また珠紋も大振り(これはD種と共通する)。6721型式は、全般に平城宮においては大膳職地区・東院地区から多量に出土するが、F種はまれでむしろ平城京城に多い。SA2960を切って掘り込まれたSK2968から出土。

平瓦 1点は完形で、長さ36.0cm、広端幅26.5cm、狭端幅23.5cm、弧深4.6cm。凹面に布目痕と糸切り痕を残す。凸面は縦位縄叩き。井戸SE2965出土。この他に凸面横位縄叩きのものが1例ある。

埴 大・小の2種類に分けられる。大は長さ36.2cm・幅31.6cm・厚さ10.3cm(1個)。小は長さ29.4cm・幅17.2cmで、厚さ6.7cmのもの(4個)と5.0cmのもの(1個)とがある。すべて井戸SE2965の井戸枠下端に据えて使用されていた。

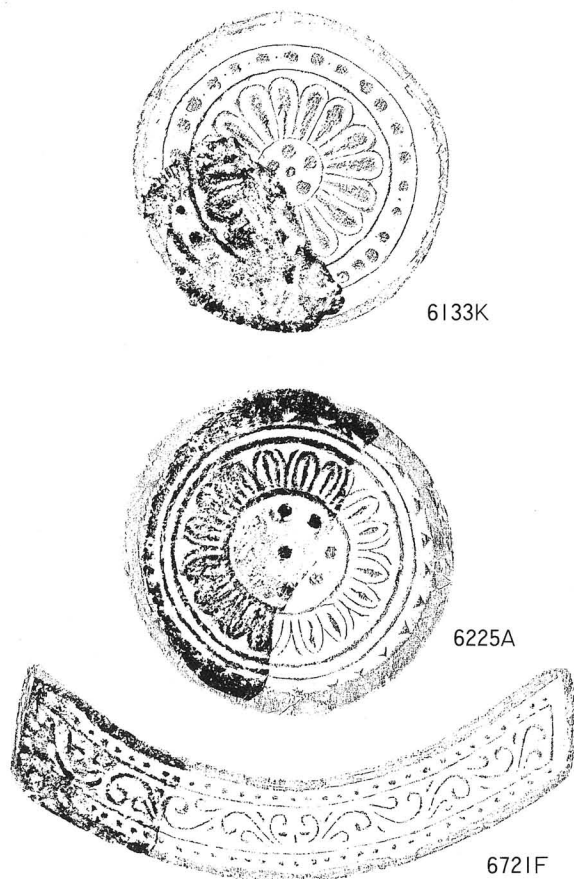


fig. 16 出土軒瓦拓影(1/4)

3. 銭貨・木製品 (fig.17、PL.10)

銭貨 小土壙 S X 2982 に埋納された須恵器壺の中には銅銭が納められていた。出土状態は fig.12 にみる通り細片化し壺内に散乱している。壺内に流入していた土ごと整理室へ持ち帰り、X線写真撮影を行った結果、壺の底面に付着した破片の他に流入土中にも細片が認められたため、水洗によってこれらを検出した。破片は総数14点を数える。破片の中には外周部が二重に銹着するものがあり、外周部片も1個体分を上回るところから、少なくとも2個体の存在を確認しうるが、全体に腐蝕が進み接合は不可能な状況にある。銭文は和・同・開・珎四文字のすべてを部分的に確認できる。開の字は門構の片側が遺存し、隸開の普通和同であることが判明するが、それ以上の細分型式は不明である。

曲物 1は S E 2965 出土の曲物底板。ヒノキの柾目材を使用。直径17.9cm、厚0.5~0.75cmで、現状では木理に沿って3片に割れ、全体の $\frac{1}{3}$ を欠失する。内外面は丁寧に削られて平滑となり、ほとんど削り痕をとどめない。周縁は鋭利な刃物で垂直に裁ち落とされ、側面に側板固定用の木釘穴が3孔認められる。有機物の沈着により内面は黒色を呈する。この底板とともに側板の細片が出土している。側板片は厚0.3cmの薄板で、内面に垂直方向と斜方向の刻み目(けびき)がみられるが、側板幅やとじ部分の仕口は不明である。

木蓋 2は S E 2988 出土の完形の木蓋で、曲物底板を再利用した製品である。直径14.2cm、厚0.45~0.6cm、ヒノキ柾目材を使用。表面は平滑な曲物底板当初の面を残すが、裏面は粗い割り面となる。表面周縁部には外形を整える際の目安となる円形の刻線が残り、この刻線に沿って周縁を垂直に削り落している。側面には曲物の側板を固定する木釘穴が5孔みられ、うち1孔には長さ1cmの木釘が残る。この曲物底板を転用するに際して、側面の木釘穴を結ぶように刻線を入れ、刻線を目安に上下から鋭利な刃物を入れて割り裂き、厚さを減じている。円板中央には径0.65×0.5cmの孔を削りぬき、ここに細棒を裏面から差しこんでツマミとする。現状では2片に割れ、表面に斜方向の刃物傷が残る。

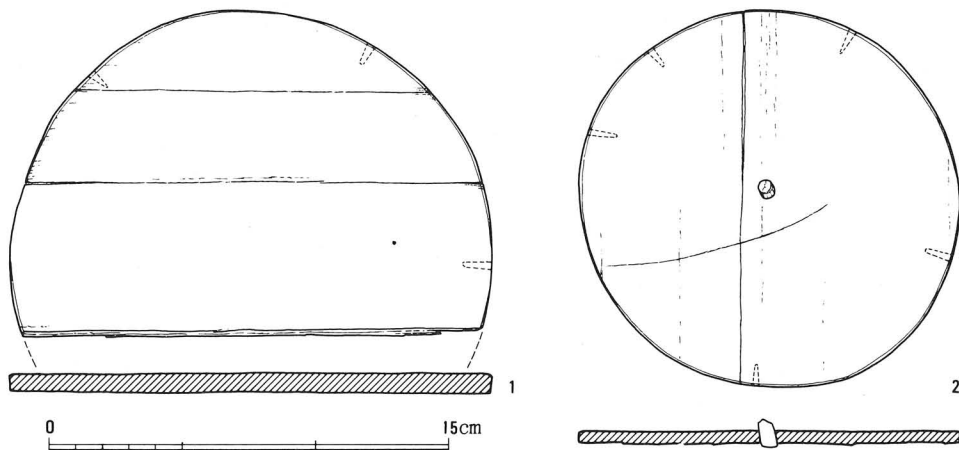


fig. 17 出土木製品実測図

4. 建築部材 (fig.18、PL.9・10)

掘立柱建物・堀の柱根・礎板は九つの柱穴(㉑～㉓)…fig.8参照)に遺存していた。

柱根㉑㉒ 南北堀 S A 2985の柱根。径は23cmと20cm。腐蝕が進んでいるが、当初から丸柱であったと考えられる。いずれも長さ24×幅9×厚さ4cmの薄板を礎板として用いる。㉒の底部は鋸で切断している。

柱根㉑㉒ 東西堀 S A 2960の柱。㉑の径は19cmで、底面・側面ともに腐蝕が進む。礎板は用いない。㉒の径は22cm、底面にチョウナの荒いハツリ痕が残り、側面にもわずかに面が残る。22×11×3cmの礎板を置くが、礎板は沈下をおこして用をなしていない。

柱根㉑ S B 2990の東妻の棟通りの柱。掘形の底に45×18×11cmと35×18×11cmの厚板二枚を南北方向に置き、直上に50×8.5～14.5×3.5cmの薄板3枚を東西方向に置く手のこんだ礎板を据え、その上に柱を立てる (fig.9)。底部は腐蝕しているが側面に面がのこる、径22cmのほぼ八角形の柱である。礎板のうち厚板の方はチョウナで調整した柱目板を年輪に沿って割った板で、もと一本の材であったものを鋸で挽いて二つに切断している。

柱根㉑㉒㉓ いずれも S B 2990の柱。断面八角形で径は各々30、30、31cm。底面にもチョウナハツリ痕がある。㉑の底部には心墨が一本わずかに残る。㉒には心墨一本と、周囲に八角形の三辺分の墨、八角形の二頂点を結ぶ心墨と平行な墨と垂直な墨が各一本残る。心墨以外の墨は八角形の断面形を作図するための墨と思われる。他の柱根はすべて心持材であるが、㉑のみは心去り材で、原木から二～三本の柱を製材することができたであろう。

柱穴㉑の礎板 柱は抜き取られ礎板のみが残存する。礎板は40×15×5cmの板材で、木口一端に丸柄が半存し、他端は焼けこげている。また両側面はチョウナハツリ、一面は二次的なチョウナハツリ、一面は年輪方向にさいている。側面の穴は間渡し穴かと推定される。おそらく太柄をもつ八角形の材(例えば東)の廃材を利用したと思われる。なお以上の柱根・礎板の樹種はすべてヒノキである。

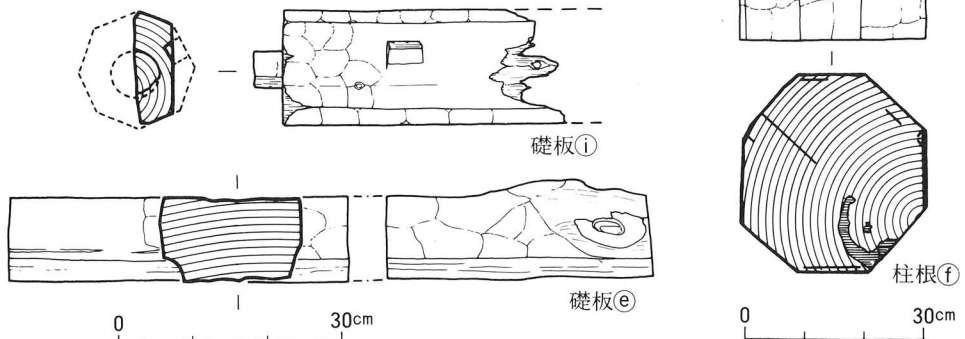


fig. 18 柱根・礎板実測図